

## 環境ボランティアは自己犠牲的か<sup>(1)(2)</sup> — 活動参加への動機づけ

安藤香織 Kaori Ando

奈良女子大学生生活環境学部

Faculty of Human Life & Environment, Nara Women's University

### 要約

環境ボランティアへの参加は社会的ジレンマとしての側面を持っている。本研究では、参加しないことが個人にとっては優越戦略であるにもかかわらずなぜ大規模な環境運動が存在するのかを、何が参加のメリットとして認知されているのかという側面から検討した。環境運動に参加する20人のコア・メンバーを対象に聞き取り調査を行った。友人からの勧誘など直接的なコミュニケーションをきっかけに参加した人が多く、全員が最初から環境問題に関心を持っていたわけではなかった。参加によって何を得たかという問いへの回答は「友人・ネットワークの広がり」「自己の有能感」「対処有効性」「活動に関する技能」の4つのカテゴリーに分類することができた。参加者は団体の目的を達成することだけでなく、様々な側面で参加のメリットを感じており、環境運動への参加は広い意味で合理的な行動としてとらえられることが示唆された。

キーワード 環境ボランティア, 運動への参加, 社会的ジレンマ, エンパワーメント

### Title

**Are participants in environmental movements self-sacrificing?: motivations for participation.**

### Abstract

Participation in environmental movements is a social dilemma because free-riding is more beneficial for individuals. The present study explored the reason why large-scale movements exist despite the fact that not participating is a preferred strategy for an individual. The present study interviewed 20 core members of environmental volunteer groups. Many of them participated in the present activity through direct communication, for example, being asked by friends. The answers to the question "What did you get through participation?" were grouped into 4 categories: expanding network, sense of efficacy of acting as a group, individual change/development, acquiring skills relating to the movement. The interviewees perceived participation rewarding in many ways, and believed that their activity had some effects. The results suggest that participation in environmental movements can be viewed as a rational action for participants in a broad sense.

### Key words

environmental volunteers, participation in movements, social dilemma, empowerment

## 社会的ジレンマとしての環境運動

地域でのリサイクル活動を推進する団体から、グリーン・コンシューマー、下宿用品のリサイクルを行う団体、グリーン・ピースのような大規模な団体など、環境保存のために活動する様々な団体が現在存在する。これらの環境運動は、市民の側から環境に対する意識を高め、身近な問題に働きかけることができるという意味で今後大きな役割を果たすようになると考えられる。杉浦・大沼・野波・広瀬（1998）は、リサイクルの環境ボランティアの活動する地域では住民が資源ごみの分別回収に参加する割合が高いことを見いだした。環境ボランティアの働きかけがリサイクルの普及に効果があることはいくつかの研究で示されている（Burn, 1991; Everett & Peirce, 1991; Hopper & Nielsen, 1991）。

環境ボランティアは、個人で行う環境配慮行動と異なり、集団で行うものであり、他の人々にも働きかけを行うという点で集合行為としての側面を持っている。また、環境運動による環境が保全されるなどの利益は、運動を行った人のみが得られるものではなく、地域の全員が得られるという点で非排他的であり、社会的ジレンマとしての側面を持っている。つまり、環境ボランティアに参加することはコストがかかる行為であるため、自分は参加せずに他の人が活動してくれる方が個人としては得だということになる。社会的ジレンマの観点から、自分は参加せずに運動の成果だけを享受するただ乗りが起きやすいことが指摘されている（Olson, 1965）。

この考えは、人間は自己利益の最大化を目的として行動するという、「合理的」な人間観にもとづいている。しかし、もし全員がそのように「合理的」に考えるとすれば環境運動に参加する人は誰もいなくなるはずだが、実際には上述のように環境運動は大きな広がりを見せている。彼らは、何を求めて運動に参加しているのだろうか。自己の利益を度外視した利他的な動機にもとづいて参加しているのか、社会的ジレンマとしての構造が認知されていないのだろうか。

安藤・広瀬（1999）は大学生を中心とした環境ボランティア団体であるエコ・リーグを対象に調査を行

い、組織への帰属意識や、重要な他者からの期待である主観的規範が活動の継続・積極的参加において重要な要因であることを見いだした。環境問題の深刻度認知、活動の有効性認知といった集団の目的に関わる要因は有意な影響を及ぼしていなかった。安藤・広瀬・杉浦・西・依藤・垂沢（2000）では環境ボランティア参加者と一般住民の比較を行ったが、環境問題に関するリスク・責任帰属認知など一般的な態度には差が見られないことが示された。集合行為を社会的ジレンマの観点から分析した研究では、集団としてのもとの目的のみを、活動によって得られる利益としてとらえるが、それ以外にも組織との結びつきや他者からの期待にこたえることなどが選択的誘因として活動を促進している可能性が示された。

しかし、これらはすべて数量的分析によるものであり、参加者にとって何が参加のメリットとして認知されているかの内容については十分に明らかになっていない。そこで本研究では、環境ボランティアの参加者に対する聞き取り調査を通じて、環境運動への参加者が何を参加のメリットとしてとらえて活動を行っているのか、参加の動機づけを質的に明らかにすることを目的とする。

聞き取り調査では、質問紙調査に比べて対象者の数が少なくなり、かつデータの解釈が恣意的になるとの批判がされやすい。しかし、質問紙調査ではあくまで調査者が何らかの予想を持って質問項目を組み立てるため、その枠外の結果を得ることは難しい。環境運動への参加のように、従来の合理的行為の枠組みではとらえられない行動の場合には、直接対象者から聞き取りを行うことで、その枠組みを超えた新たな知見を得られる可能性がある。また、人数が少ないとはいえ一人の対象者から得ることのできるデータは、聞き取り調査の方が量的にも質的にも質問紙データよりも豊かである。また、聞き取り調査の場合、すべてのデータを提示することはできないためデータの提示や解釈がある程度主観的になるのは避けられないが、本研究では回答を分類し、カテゴリーの出現頻度を数えるなどして解釈の恣意性を減少できるよう考慮した。

環境ボランティアへの参加者に対しては、「環境問題に非常に関心の高い、一部の人」が行っているというステレオタイプがあると考えられる。参加者は参加

前から環境問題への意識が一般の人々と異なっていたのか、参加者と環境問題との関わりについても検討を行う。安藤ら（2000）では環境ボランティア参加者と一般住民では環境問題に関する一般的認知では有意な差が見られないという結果を得ているが、もし実際に環境問題への関心に違いが見られないならば、何が参加する人とならない人の違いであると言えるのかを聞き取り調査の結果から検討する。

### 参加のきっかけ

参加者と非参加者を分ける壁について考える際には、参加へのきっかけについての分析が重要であると考えられる。安藤・広瀬（1999）の質問紙調査では、「友人・知人に誘われた」が約4割と最多の回答であった。この結果からは、対人的ネットワークを通じた直接的な勧誘が最も効果を持っていたことが示唆された。また安藤ら（2000）では、環境ボランティア参加者の方が、一般住民よりも町内・町外の友人数が多いことが示された。このことは、もともとネットワークの広い人が勧誘を受けやすい、ボランティアに参加することによってネットワークが広がったという2つの可能性を示唆している。

集合行為に関する研究の一分野である資源動員論では、既存のネットワークが存在する場合に集合行為への参加が起こりやすいことに注目した（Oberschall, 1993; Fireman & Gamson, 1979）。上記の研究におけるネットワークは組織としての形態をとらない友人同士のゆるやかなネットワークであるが、対人的つながりが存在する場合には参加のコストが低く認知されるのではないかと考えられる。

**手続き**：最初の段階では、各団体のリーダーなど、環境運動団体で中心となって活動しているキーパーソンに直接コンタクトをとり、話を聞きに行く。そのキーパーソンに団体のメンバーや他の団体で連絡を取っている人などを紹介してもらい、順に話を聞きに行く。環境運動のネットワークの中の、中心的ルートを伝って聞き取り調査を行うことになる。調査の対象者に次の対象者を紹介してもらう方法はスノーボール・サンプリングと呼ばれる。本研究では、できるかぎり多様な組織・年齢・立場の人を対象にする。

**調査方法**：半構造化面接法によって、聞き取り調査を行った。あらかじめ用意した質問紙にそって質問を行い、自由に回答してもらう。回答時間に制限は設けなかった。必要なことはそのつど尋ねた。回答はノートにメモをとると同時にカセット・テープに録音した。回答時間は主に30分から2時間の範囲で、1時間前後のケースが多かった。本研究では、次の質問に対する回答を主に分析する。結果の分析方法については結果の項で紹介する。

1. どのようなきっかけで環境ボランティアを始めたか
2. それまで環境問題にどれぐらい関心があったか
3. 環境ボランティアを始めてから環境問題に対する考え方が変わったか
4. 自分のやっている運動は、環境問題の解決に効果があったと思うか
5. 環境ボランティアに参加することによって、自分は何を得たと思うか

## 方法

**対象**：何らかの組織に属して環境運動を行っている人20名。男性10名、女性10名。環境運動の種類については、大学生の組織にかぎらず、幅広く対象とする。

## 結果

### 回答者の属性

回答者の年齢は20歳から58歳、平均29.2歳であった。うち、学生は9名であった。

回答者のプロフィールを表1に示す。一人が複数の

団体に所属しているケースが多かったが、表中の参加団体は、主に所属する団体として回答のあったもののみを記した。団体の中ではエコ・リーグのメンバーが多かった。それぞれの団体の概要を表2に示す。

### 活動参加のきっかけ

「どのようなきっかけで環境運動に参加したか」という質問に対する回答を図1にまとめた。分析手順は、まず各自の回答を短くそれぞれ1枚のカードに書き出した。次に勧誘された側（既存の団体に参加した者）と勧誘した側（団体の創始者）に大きく分け、さらに勧誘ルートを直接的コミュニケーションと間接的コミュニケーションに分類した。その中で類似した回答を1つのカテゴリーとした。

図中の矢印は、勧誘された側と勧誘した側に相互作用があることを示す。ただし、必ずしも今回の聞き取り調査を行った者の中で勧誘しあったわけではない。

直接的コミュニケーションには友人から誘われた、もともと別の団体に入っていて、その団体の他のメンバーから誘われたなど、直接的な対人的相互作用があるものを含めた。「環境関連のイベントに参加した」に関しては、イベントの情報は友人・知人から聞いたという場合が多く、イベントの中でも様々な対人的相互作用が行われるため、直接的コミュニケーションを含めた。間接的コミュニケーションは、ビラやポスターを見たなど、不特定多数に向けた情報への接触をきっかけとしているものを指す。

既存の団体に参加した人の中では、直接的コミュニケーションによって参加した人が10人、間接的コミ

表1 対象者のプロフィール

	性別	年齢	参加団体
1	女	22	エコ・リーグ
2	女	22	エコ・リーグ
3	男	22	エコ・リーグ
4	男	22	オイル・バスターズ
5	女	28	オイル・バスターズ
6	女	22	Song of Earth
7	男	26	Song of Earth
8	男	58	藤前干潟を守る会
9	男	21	オイル・バスターズ
10	女	21	エコ・リーグ
11	男	23	Song of Earth
12	女	20	オイル・バスターズ
13	女	43	中部リサイクル
14	女	23	中部リサイクル
15	男	24	エコ・ワーク・ステーション
16	男	44	中部リサイクル
17	男	25	エコ・リーグ
18	女	26	ワーカーズ・エクラ
19	女	22	エコ・リーグ
20	男	43	ニュー・パラダイムの会

注1 参加団体は、主に所属する団体を示す。

注2 年齢は、調査当時の年齢を示す。

表2 各環境団体の概要

	団体名	概要
1	エコ・リーグ	大学生を中心とした団体で、全国に支部を持つ。環境問題について考え行動するためのネットワーク。各地の様々な団体をサポートすることが主な目的の1つ。全国版情報誌を発行し、年に数回全国の会員が合宿形式で集まる全国集会を行う。
2	オイル・バスターズ	ナホトカ号重油流出事件の際に、名古屋から重油回収ボランティアにでかける人のために、バスを手配した。当時はほぼ毎日、毎週に渡ってバスを出し続けた。オイル・バスターズのメンバーは参加者の募集、バスの手配、添乗、現地での連絡などを行った。
3	Song of Earth	名古屋大学の環境サークル。エコ商品の推進キャンペーン、工学部とりこわしの時のフロン回収キャンペーン、ごみの実態調査、教養部で捨てられているごみの調査、学園祭でごみがでないような模擬店の企画など、名古屋大学内でできる環境保全運動を行う。
4	藤前干潟を守る会	調査当時名古屋市には新たなごみ処分場を藤前干潟を埋め立てて作る計画があった。藤前干潟をごみの埋め立てから守るのが団体の主な目的。藤前干潟は渡り鳥の餌場として貴重な場所であり、バードウォッチャーも多く参加した。運動の成果と世論の高まりによって、その後名古屋市は藤前干潟をごみ処分場とする計画を断念した。
5	中部リサイクル運動市民の会	今の生活のあり方を見直して、循環型社会に、環境にも優しい社会にしていく。幅広く環境問題に関して働きかける。月刊『リサイクルニュース』（現在は『E's』）の発刊や不要品のデータベースシステムの設置、フリーマーケット、環境イベントの開催などを行う。
6	エコ・ワーク・ステーション	地球にやさしい仕事をしたい人と地球にやさしい仕事をしている企業の橋渡しをする。環境問題に取り組んでいる企業、環境に配慮した経営を行っている企業に対して取材を行い、就職を考えている学生向けに雑誌を発行する。就職情報も掲載する。
7	ワーカーズ・エクラ	皆でお金を出し合っただけで運用して皆で仕事をする、ワーカーズコレクティブ形式の団体。環境によい商品や健康によい商品を自分たちで評価し、よいものを生協や流通業者に紹介する。生ごみのリサイクル関連の商品などを扱う。女性の起業コンサルティングなども行う。
8	ニュー・パラダイムの会	サラリーマンなどの仕事を持っている人間が毎日の生活の中で環境問題を考える会。講演会や映画の上映会などを行う。

注1 各団体の概要は、調査での回答をもとに解説した。

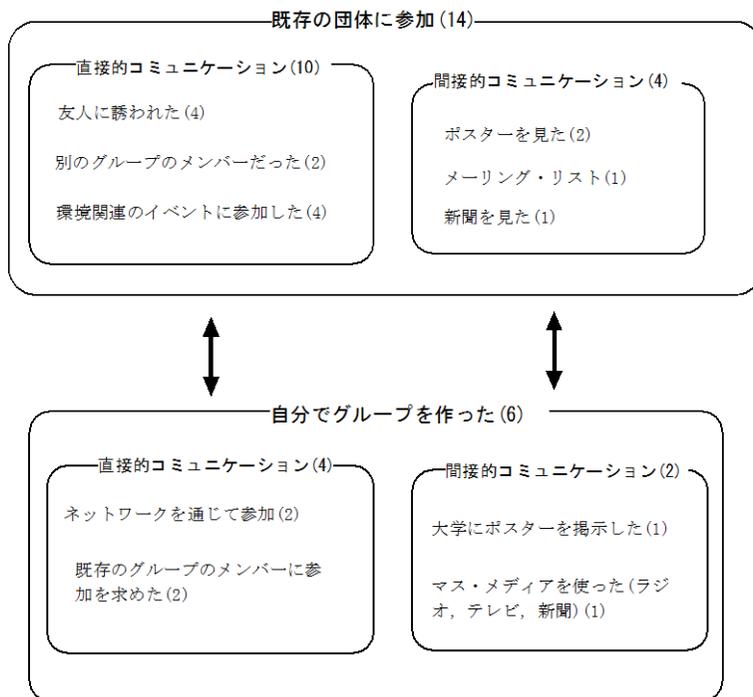


図1 環境運動参加のきっかけ

コミュニケーションによって参加した人が4人と、直接的コミュニケーションが参加のきっかけとなっている場合が多かった。「友人に誘われた」以外には環境関連のイベントがきっかけで参加した人が4名と多かった。最初は環境問題に関心があっても団体に入って活動しよう、というほどではなかった人が、人との出会いなどイベントでの体験をきっかけに団体に加入するという場合が多かった。その意味でも、イベントを企画することによって新たな人を勧誘する意味は大きいと言えるだろう。知り合いから勧誘されることによってその団体の信用性が増し、一度イベントに参加することでコミットメントが形成されると考えられる。

ギャザリング<sup>(9)</sup>がきっかけだった。Willの事務局でパンフレットを見つけて、行って見て、そこにいる人たちがすごく刺激的だったから。ずっとコンタクトとってたいな、って気持ちがあって。  
(10)<sup>(4)</sup>

間接的コミュニケーションによって参加したという人はもともと環境団体に入ろうと思って情報を探していたところ、新聞やポスターなどでその情報に接触した、という場合が多かった。直接的コミュニケーションの場合にはもともと入ろうと思っていたとは限らなかった。ポスターの掲示などははじめから意識の高い人を勧誘する場合には向いているが、それ以外の人を勧誘するためには直接的コミュニケーションの方が強力であると考えられる。ただし直接的コミュニケーションの場合は直接の知り合いしか勧誘できないため、重なり合いの多い同質なネットワークになってしまう。異なるネットワークに属する人を勧誘するためには間接的コミュニケーションも必要である。

自分が今の団体の創始者だ、という人も6名含まれた。団体を作ろうとした動機としては、「何らかの問題があって、その問題を放っておけない」「自分の生き方を自分で作りたい」「他地域で結成された環境団

体の話を聞いて」などが報告された。団体を作った人々は必ずしも最初から「環境団体を作ろう」と意気込んでいたわけではなく、ごくふつうの人や学生がちょっとしたきっかけで団体を立ち上げた、という場合が多かった。次のインタビューもその一人のものである。

大学に入って、ごみがおちていたりして汚いのが気になった。ごみばこじゃないとこに落ちてるとか。ばんだがや（大学内のパン屋）とか生協でたくさん袋もらし、もったいないなーって、気になった。一年の時に他のサークルで一生懸命やった。2年の名大祭おわったときに、これで何もやらなかったらきつと何もかわらないだろうなーって思ってた。(06)

団体を立ち上げる時の方法としては、身近な人に対する人的ネットワークを使って呼びかけた、というケースが2件、エコ・リーグや生協活動など、自分がすでにメンバーとして参加している既存の団体に呼びかけて、新たな組織として活動を始めた、というケースが2件であった。これらは直接的コミュニケーションに分類できる。間接的コミュニケーションを用いたケースは大学にポスターを掲示した1件と、マス・メディアを用いた1件であった。その場合にも、すでに何らかの団体に所属している人が何人かまとまって呼びかけに応じた、という報告が見られた。これらの結果から、新たに活動を行う場合にも、既存のネットワークを用いた方が動員しやすいということが伺える。資源動員論の知見と一致するといえるだろう。

### 環境問題への関心

「環境運動に参加する前から環境問題に関心がありましたか」という問に対する回答を、「もともと関心があった」「関心はなかった」「わからない」の3つに分類した。もともと関心があった、と回答した人は全体の70%（14名）であった。「わからない」という人は10%（2名）、「関心はなかった」という人は20%（4名）であった。

「関心はなかった」という人について、一人ずつ参加動機を分析した。「イベントに参加してから、関心

を持つようになった」「もともと鳥に関心があって、その鳥のねぐらである干潟がごみで埋め立てられることになったから」「知り合いから手伝ってくれと頼まれた」「新しい生き方を探していた」という回答が見られた。

難しい問題なんですけど、高校の時とかは正直あまり（環境への関心が）なかったですね。ただ、農家になりたかったから、自然に対する興味はあった。熱帯雨林とかは見てた。ただ、リサイクルとかあまり好きじゃないんで、ああいう地味なの。あんまり活動したこともないし。今でも好きじゃない。好きじゃないけど、面白いとは思う。なんていうか、嫌いじゃなくなった。めんどくさくなくなったというか。リサイクルとかめんどくさい、とか思ってたんだけど、それだけ手をかける価値があるな、というか最近思ってる。環境問題に興味が出たのは、ユースエコフェスティバルに連れてかれてから。(04)

藤前干潟を守る会の場合には、野鳥のねぐらである干潟がごみで埋め立てられるということで、野鳥の会など、バードウォッチングや鳥が好きの人が最初集まり、徐々にごみ問題などの環境問題への関心が高まっていった。運動を続ける中で、鳥仲間ではないがごみ問題に関心のある人々が加わり、活動が広がっていった。以下のインタビューからは、異なる価値観の人が集まりネットワークが広がること自体が、運動の楽しさとして認知されていることが伺える。

最初はバードウォッチャーが多かった。昔埋め立てに反対したときはバードウォッチャーのグループが仲間に呼びかけてやったんだけど、藤前干潟の場合は、そこを埋め立てるのがごみだ、ということだったので、今度はちょっと状況が変わった。鳥のことは良く知らないけど、自分の出したごみでそんなとこ埋めるのはいやだっていう、そういう気持ちね。ふだんそんなにゴミだしていいのかなあと思っていた人たちが、そういう鳥の餌場をつぶすと聞いて、それはゆるせんし、いやだ、ということで、鳥は知らないけど参加してくる人たちが多くなってきて、今はどっちかっていうとこっちの方が人が主力みたいね。僕は両方つなぐような感じにいるんだけど。鳥が好きで、それ以外

のことはやりたくないけど、情報を提供したりとかはする、という人がいる一方で、藤前干潟はごみ問題の象徴だから、ここはぜったい守らないかと。そういう人たちにとっては、使い捨て社会の構造を変えようとか、ごみのでない町を作ろうとか、そういう社会的な発想の人も半分ぐらいいる。正義派とか社会派とか、暮らし派とか、鳥派とか、いろんな発想の人がいるんですよ。そこが運動のたのしいところかな、と思います。(08)

活動に参加してから、次第に「環境」に関心を持つようになった、という人が多かった。「関心はなかった」と回答した4名のうち、2名はその団体の創立者であり、10年以上活動を続けている人であった。活動を始める前の段階において環境問題に関心があるかということは、活動を続ける上での必要条件ではないと考えられる。言い換えると、環境問題への問題意識が明確で動機づけの高い人のみが環境運動に貢献する、ということはないといえるだろう。

環境問題への関心の変化、という点に着目すると、「環境問題は単独の問題ではなく、女性問題や、建設事業中心の政府の政策など、様々な問題に共通項があることに気づいた」など環境問題からさらに問題意識が広がる傾向が見られた。環境問題の解決のためには社会の仕組みや考え方自体を変える必要がある、との認識は非常に根本的な視野の展開であると言えるだろう。また、このことは環境運動からさらに異なる市民活動に発展する可能性を示唆しており、現に政治、心理学など異なる分野に関心を示している人もいた。

色々視野が広がったというか、どこから入っても、同じとこにいきついちゃうんですよ。鳥を見ようと思った人も、雑木林を好きだという人も、同じとこにきちゃう、根元は開発であったり、そのしくみであったりする、その仕組みを見ていくと、現在の強者と弱者の関係というか、女性問題や、障害者と健全者の構図とか、みんな共通項があるな、ということがみえてきちゃう、そういう仕組みを変えていかないと、基本的な解決は難しい。(08)

環境運動とは何かわからないんです。環境問題とは何かと言われてもよくわからない。ずっとこういう問題には関心がありました。それを環境と言

っているだけなんです。そうとしかいいようがない。特に意識はしてなかったけど、何か大学入ったらやってやろうと思ってました。昔から同じようなことを言っていたんです。何か道路が多すぎるんじゃないかと、何か工事が多すぎるんじゃないかと。でもそれが環境とはわからなかった。大学に入って環境と言っているだけなんです。(09)

### 活動の有効性

「自分たちの行ってきた活動は、環境問題の解決に何らかの効果があつたと思いますか」という問に対する回答を分析した。「自分たちの活動には効果があつた」とする人は74% (14人)、「わからない」とする人は26% (5人)であり、「効果はなかつた」とする人はいながつた。ここでの質問は、身近な部分で、対象者の所属する団体の活動に効果があつたかどうかを尋ねた。自分達の活動については、何らかの効果があつたと認知している人が多かつた。

自分たちの活動の効果については、具体例として「あ、こういうことも大事なんだ、とまわりの人の意識を変える」「環境やボランティアに関心のある人のネットワークを作れる」「(グリーン・コンシューマーの活動で)環境のことを考えているお店の後押しになる」などがあげられた。これらは直接的に環境に対する効果ではないが、個々の活動の効果は様々な方法で認知されていることが示された。

一方、グローバルなレベルの環境問題に関しては悲観的な意見が目立つた。

現実問題、環境問題なんて解決すると思ってやっけてない。どうなつたらいいかわからないんですよ。他の人はいったい何でやっけてんでしょね。いっこ解決しても、根っこはおなじだから、あとからあとから出てくる。もうちょっと何かないとだめだと思う。(03)

環境はどうやっても結局何が変わるとは思っていないから。ま、三国(バスターズの活動地)はちょっと特別だけど。これは自分の考え方を換えさせるような事例だった。でも、僕らが何かやっただからといって、オゾン層は消えてなくなるだろう

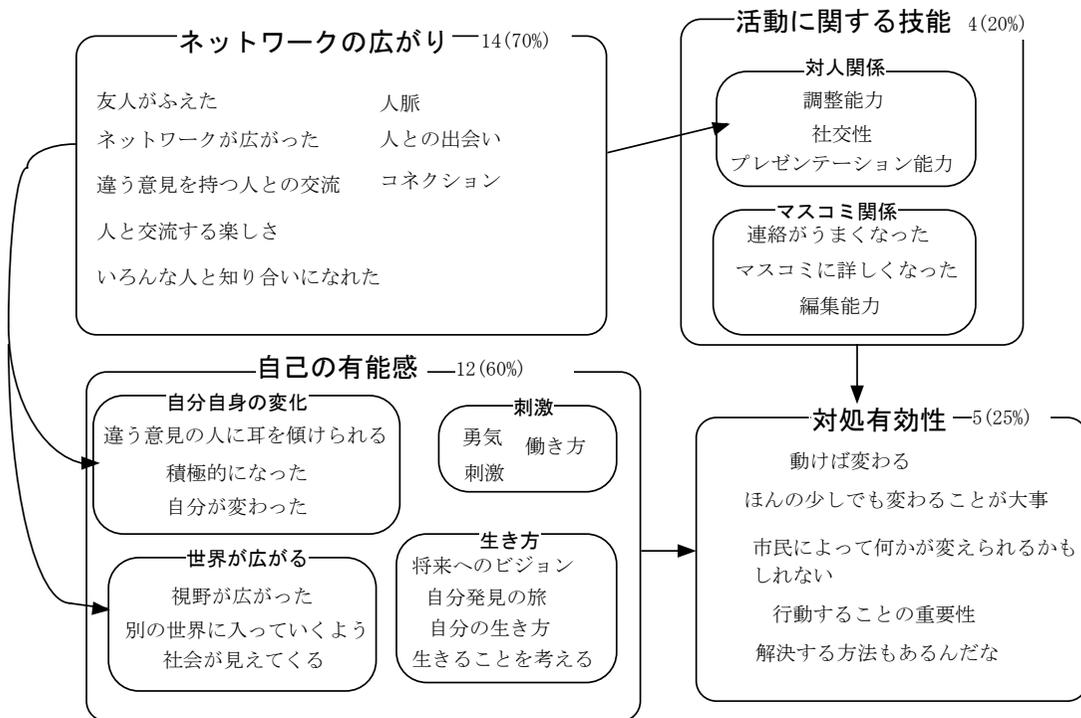


図2 活動によって得られたもの

し、温暖化は止められないだろうし、環境が良くなるということにはけっこう悲観的。でもバスターズに関しては結構きれいになったと思ってる。(笑) (04)

もともと自然環境に対する働きかけは非常に長い時間がかかるため、効果が認知されにくい。しかし、効果を感じることができなければ、環境運動に参加し続ける動機づけは低くなってしまおう。今回のインタビューの回答者は、地球規模での環境問題を解決するのは難しい、と認めつつも個々の活動の効果については比較的肯定的にとらえる、という二面性が見られた。

### 個人として得られるもの

「環境ボランティアに参加することによって、自分

は何を得たと思いますか」という質問によって、参加によって個人のメリットがどのように認知されているかを探った。

分析は、以下の方法により行った。回答の中からキーワードを抜き出し、1つのキーワードを1枚のカードに記入する。その内容によって類似のカードを集め、1つのカテゴリーとする。カテゴリーにはその内容を表す見出しをつける。カテゴリー分けの枠組みはあらかじめ予想を立てず、仮説発見的目的で行った。その結果を図2に示す。見出しの横の数値は、そのカテゴリーに含まれるキーワードに言及した人数と、全体の人数に占める割合を表す。人数よりもキーワードの方が多くカテゴリーがあるのは、1人が複数のキーワードに言及しているためである。

回答は、大きく分けて「ネットワークの広がり」「自己の有能感」「対処有効性」「活動に関する技能」の4つのカテゴリーに分けることができた。「ネット

ワークの広がり」は「人とのつながりができた」や「自分自身のネットワークが広がった」などネットワークの拡大を示す。「自己の有能感」には、自分自身の成長や変化など、自分自身の能力や考え方に関する回答を含める。「活動に関する技能」は、活動への参加によって、具体的な技能が身についた、という回答を含めた。「対処有効性」は、団体としての活動に参加することによって、自分たちでも何らかの変化をもたらせることがわかった、という対処有効性に関する回答を含めた。

「対処有効性」のカテゴリーは「自己や外界の問題に積極的に対処できる能力を得たという自信」というエンパワーメントの概念に最も近いと言える。「自己の有能感」の視野が広がるなどして自分自身が変わった、という認識や「活動に関する技能」の具体的な対処の方法を身につけた、という感覚が「対処有効性」の源泉になっていると考えられる。「自己の有能感」「活動に関する技能」はそれ自身広い意味でのエンパワーメントに含めることもできる。「ネットワーク」は直接的には対処有効性に影響を及ぼさないが、ネットワークが広がるのが「違う人の意見に耳を傾けられるようになった」「積極的になった」という自分自身の変化や「世界が広がった」という認知などの「自己の有能感」「社交性が身についた」などの「活動に関する技能」と結びついていると考えられる。

「ネットワークの広がり」についての言及が最も多く、14名(70%)が活動の結果得られたものとして「人とのつながりができた」「いろんな人と知り合いになれた」「ネットワークが広がった」などを挙げた。活動によってネットワークが広がり、それが活動の結果得られた重要なこと、として認知されていることが示された。「ネットワーク」という単語は実際の回答の中でも多く用いられていた。

人、かな。人が大きいかな。集まってくる人が好きだからその場にいたいってのがあるし。私も変わる。だからジェンダーにしても環境にしても私のかんがえてることを聞いてくれる人に出会えたってのも大きいと思うし。(02)

だから得たものというのは、もう一つはね、ネットワーク。色んな人たちと手をつないでいくこと

の大切さ。自立をしながら、しかし手をつなぎあっていくことの大切さ。自立と共同ってのかな。共同しながら、お互いに手をつなぎ合いながら、ネットワークをいっぱいつなぎながら、お互いに育ちあっていく。そんな感じが大切かなあと。(18)

それ(運動)が苦しいだけだったら、長続きするわけではないんですよ。いろんな人との知り合いがおこるわけですよ。いろんなことに関心がある人があって、鳥のことには関心がなくても、ごみのこととか。食べ物に関心がある人とかいて、そういう人たちとの交流が始まる。そういう人があるのか、そういうことも大事だよな、とか思うじゃないですか。その人達はぼくから鳥の知識を得たり、鳥屋が見る視点を得てくれるだろうし、僕は生活のレベルでいろんなことやってる人の考え方がわかる。それがなんといっても楽しいんだよね。そういうつきあいが増えてくる。それが自分の財産という感じがして、自分にとっての楽しみなんだよね。(08)

「ほかにも取り組んでいる人があるのを知ることによって勇気が出た」という回答がいくつか見られ、環境運動を通じて得た友人やネットワークは、単に友人の数が増えたというだけではなく、環境問題に関心があるなど、自分と関心・態度が類似した人と知り合うことができたということが重要であることが示唆された。日常生活では周りに環境問題に関心を持っている人があまりいないため、環境について話し合うことができる人と知り合えたというだけでも非常にインパクトが大きかったことが伺える。

ギャザリングに行ったときに、こんなに同じこと考えてる人がいっぱいいるんだー、というのは驚きだった。高校とか大学ではなかなかそういうこと話す機会がないし、もしかしてそういうの考えてるの自分だけじゃないかと思っていたので、すごいはげみになった。(06)

「自己の有能感」に関する回答は、友人・ネットワークについて多く、12名(60%)が言及した。その内容について詳しく見ると、「いろんな刺激があって自分が変わった」「視野が広がった」「違う意見に耳を

傾けられるようになった」「将来に対するビジョンが持てた」「自分発見の旅だった」など、自分自身についての変化を様々な切り口で表現しており、「ネットワークの広がり」の 카테고리のように共通の単語が繰り返し現れるということにはなかった。自己の表面的な変化ではなく、自分自身の生き方や考え方など、自己の根本的な部分での変化に関する報告がいくつか見られた。実際に、今回の聞き取り調査の対象者は、環境問題に取り組むことを一生のライフワークとしている人も何人かおり、彼らにとっては環境運動との出会いは確かに一生を変えるものだったと言えるだろう。ただし、本調査では環境運動のコア・メンバーを対象としているのでそのような表現が多く見られたが、一般のメンバーも対象にした場合にはその割合は減らさるだろう。

自分発見の旅だからさ、自分を深めたことだろうね。それ以外何者でもない。だって、何やるにしても全部跳ね返ってくるわけでしょう、自分に。ただ、嫌でも見えるよね、自分が何者かっていうのが。ギリギリのところに晒しているわけだから。(16)

それはやっぱり自立と言うのかな。経済的にはなかなか自立できないんだけど、自分が自分の生き方を作っていくと言うのかな。少しでもやっぱり社会的にもいい意味のあること、意義のあることをやっていきたい、そういう思いっていうのはエクラの中にはあるから。(18)

「対処有効性」の 카테고리については、5名(25%)が言及していた。「行動することの重要性を感じた」「少しでも変わったということが大事だと思った」「解決する方法もあるんだな、と思った」などの意見が聞かれた。活動を通じて、それまでは個人では何もできないと思っていたけれど、何か解決する方法があるかもしれないと思えるようになった、など「力を得た」、という感覚の報告があった。

動かなきゃ変わらないな、というのを。動けば変わるということにもなる。ほんの少ししか変わらないじゃなくて、ほんの少しでも変わったということが大事だと思うようになった。(06)

その前も関心はあったんですけど、一般の人には何もできないと思っていたんですよ。企業の偉い人になるとか、官僚になるとかしないと、影響力を持ってないから変えることはできないんじゃないかなってずっと思っていたんですよ。でもそうじゃなくて、一人一人の市民とか消費者とかそういう普通の人が変わっていくことで世の中が変わっていくかもしれないっていうのを信じられるようになった。この時から結構変わったと思います。考え方として。(19)

「活動に関する技能」については、4名が言及しており、「プレゼンテーション能力がついた」「マスコミに詳しくなった」「編集能力を得た」など、個々の活動の内容に応じて、具体的な技能が身に付いたという報告があった。

連絡取るのがうまくなった。ファックス使ったり。こうやればいいのね、ということが。バスターズ入る前は世間知らずだったから、ファックスの送信書の書き方も知らなかったし。連絡するのに抵抗がなくなった。初めての人に電話かけるのってけっこうおっくうじゃないですか。そういうのがなくなった。なんていうか、図太くなった。(04)

また、今回は独立した 카테고리として分析はしなかったが、「活動の楽しさ」について各所で言及する人が多かった。環境運動は外から見ると大変そうな面も多いが、中心的に活動している人はコストも感じていると同時に、十分な「楽しさ」も活動の中から得ていた。

何でやってるかといっても、好きだから、としか。昔からやってるから。自分の好きなことやってて、それがたまたまボランティアという形になったんだと。非常にこれ楽しいです。そりゃ苦しいこともあります。寝てないとか、ごはんが食べれないとか。でも楽しいこともいっぱいあるんで。面白くてやめられないなど。こういうことはずっとやってしまうと思う。(09)

討 論
-----

参加のきっかけについての分析では、友人などの身近な対人的ネットワークを通じて勧誘された、あるいはもともと何らかの団体に所属していて、そこを通じて勧誘された、というように直接的コミュニケーションによって参加を決めたという人が多く見られた。これは質問紙調査（安藤・広瀬，1999）の結果とも一致している。新たに団体を創設する場合でも、ネットワークを通じての勧誘が多く見られ、社会的ネットワークを通じての勧誘が参加を促すために効果的であることが示唆された。社会的ネットワークの役割は単なる情報提供のみでなく、自分の知っている人から直接誘われるということで、活動を信頼できる、また環境問題が重要であるという規範を伝えていることを意味すると考えられる。また、今回は20名8団体中、その団体の創始者であるケースが6件含まれた。コア・メンバーを中心に聞き取り調査を行ったため、そのようなケースが多かったと考えられる。

環境問題への関心については、必ずしもすべての人が最初から関心があったわけではなかった。最初はそれほど深刻な問題としてとらえていなくても、何らかのきっかけで活動を始める中で、認知が変化していったと考えられる。また、活動を続ける中で、環境問題だけでなく他の社会問題にも関心を持つようになったという回答がいくつか見られた。環境問題に対して働きかけを行うことによってネットワークが広がったり視野が広がるなどして、環境問題以外にも運動が広がっていく可能性があることが示唆された。

活動の有効性については、グローバルなレベルでの環境問題については悲観的な見方が多いが、自分達の行ってきた活動については何らかの効果があったという回答が多く、アンビバレントな面が見られた。活動への動機づけを維持するためには何らかの側面において自分たちの活動を肯定的に評価する必要があるため、身近で目に見える範囲では効果があったと認知していると考えられる。また、それぞれの団体によって目的が異なるため、最初から環境問題全体に働きかけるこ

とを目標として設定する必要はないだろう。オイル・バスターズのように活動の目的が1つではっきりしている場合には活動の効果が見えやすいと考えられる。一方、エコ・リーグの事務局のように他のグループをサポートすることを目的として、グループ間の連絡や事務的作業を行う団体は活動の効果が見えにくいだろう。今後は団体の種類別に活動の有効性認知がどのように行われているかを詳しく検討することが必要であるといえる。

活動によって個人として得られたものでは、「ネットワークの広がり」「自己の有能感」「対処有効性」「活動に関する技能」が挙げられた。その中身はそれぞれ異なり、人生が変わったなど、非常に大きな変化を感じている人もいた。半数以上の人々が「ネットワークの広がり」をあげており、人とのつながりが非常に重要であることが示された。これらは、団体のもともとの目的とは異なるが、活動に参加した人のみが得られることであり、社会的ジレンマにおける「選択的誘因」であるといえる。活動に参加することのメリットは、活動の目的を達成すること以外にも様々に認知されており、参加者にとってはコストに見合うだけの肯定的な側面があることが示唆された。

安藤・広瀬・杉浦・依藤（1999）では、自分自身の有能感、グループへの連帯感、活動の有効感をエンパワーメント（自分や外界に積極的に対処できる能力を得たという自信）としてとらえ、活動を通してエンパワーメントを得ることによって、それが次の活動への参加意図となることを示した。本調査においても、参加者はそれとほぼ対応して、ネットワークの広がりや自己の有能感などのエンパワーメントを感じていた。

環境運動で中心的に活動している人々は、その活動に時間をとられコストが大きいだけに、自己犠牲的に見られがちである。しかし、実際に活動している人は、他人のためにやっているのではなく、自分の楽しみとしてやっていることを繰り返し強調した。そこには「自己犠牲的に見られるのは嫌だ」という意識が見える。聞き取りの中では、「市民活動家なんてあやしいと思うよ。人のためにやってるなんてうそっばい」「みんななんでやってるのかわからない」という意見も聞かれた。環境ボランティアの「イメージ」が課題の1つであると言えるだろう。インタビューの中では、

阪神大震災以降ボランティアのイメージが変わったという指摘もあった。

今までボランティアっていうと、うさんくさい、というイメージが非常にあったと思う。自分もあやしいと思う。偽善者とか、だれかの命令でやってるんじゃないかとか。おまえはふだん何やってるんだとか。なぜやってるのかわからない。そういうイメージがあったんだけど、阪神大震災があって、だんだんよくなった。(09)

新たな参加者を募る場合にも、深刻で手間のかかる面だけ強調されているのは多くの人の参加を求めるのは難しいだろう。その意味でも環境運動のイメージは重要であると考えられ、現在のメンバーはなるべく自己犠牲的なイメージを変えようとしていると思われる。活動の「楽しさ」が強調されるのは、それも1つの原因であるだろう。ただし、楽しさだけが強調されては環境運動ではなく、他の活動でもよいことになってしまう。活動を楽しむこと以外にも、活動に対する意味づけもやはり必要であることが伺える。

できたらテニスサークルみたいな極楽サークルのノリでやりたい。楽しいことをやってるんだ、って意識でやりたい。そういうことをやろうって、楽しいことに飢えてるやつがいいな。(09)

楽しくやるのは重要だけど、それだけじゃないですよ。楽しいことだったら、他にも楽しいことはいっぱいある。だからそれは2次的な条件。1次的じゃない。時代認識とか、意味づけとかがいると思う。(04)

何を「楽しい」と感じるかは、人によって違う。カラオケに行ったり、コンパをしったりするのが楽しいと思う人もいるだろう。一方で、だれかの役に立ったり、大勢で一つの目的のために動くことを楽しいと思う人もいる。それは、外側から見れば利他的な行動だが、その個人にとってみれば他人の役に立つことや自分の関心のために動くことが自分にとって「楽しいこと」として自己の効用関数<sup>(5)</sup>の一部になっているため、広い意味での「合理的」な行動であるともいえる。こ

れは「利他的な動機」というわけではなく、他人を助けること自体が自分にとっての喜びであるということとは、自分にとっての「利益」であり、「個人的利益」の中に入れて考えることができると考えられる。

なんでこういうのやってるかって、経済理論で説明できないというか、経済理論の外側ですよ。僕はだれかを喜ばせたくて、それに食欲だから。人と一緒に喜べたら楽しい。僕にとって楽しいことは、人が喜ぶこと。それにすごく飢えてる。自分が楽しいことにいつも囲まれていたいから、やってる。(04)

もう欲求のままに動いてます。やっぱり環境が大事なかな。何かやらなきゃいけない、と思って、やりたいなやりたいなと思ってもどうしていいかわからないのはいやだから。(02)

環境運動には社会的ジレンマの側面があり、環境保全という運動によって得られる利益は全員に拡散するが、運動に参加した人だけがコストを払うことになる」と述べた。しかも、環境運動の場合、環境に影響を及ぼすのは時間がかかるため運動の効果が見えにくいと考えられる。しかし、現実には大規模な環境運動も存在する。聞き取り調査の結果を見ると、環境運動による利益については、必ずしも地球環境全体の保全を目的とするのではなく、個々の地域やまわりの人に影響を与えるという個別の目的が達成されたことと認識されていた。また、「個人として得られたものは」という問いに対しネットワークの広がりや有能感などが挙げられており、活動に参加することはコストがかかるだけでなく、参加した人のみで得られる無形のもの（選択的誘因）があることが示された。これらの結果から、個人の利益は、幅広い意味でとらえる必要があることが示唆された。

## 注

- 1 本研究の一部は、International Congress of Psychology, Stockholm, Sweden (2000) にて発表された。
- 2 本研究に協力して下さった、様々な環境団体の皆様に

深く感謝いたします。

- 3 エコ・リーグの全体集会。年に数回行われ、全国から環境に関心のある若者が集まる。
- 4 それぞれの発言の末尾に、表1での通し番号を示す。
- 5 効用関数とは、一定の対象に対する個人の選好 (preference) の定量化である。効用関数を用いることにより、例えばどの食べ物が好きかなどの主観的な個人の好みを定量的に記述することができる。

杉浦淳吉・大沼 進・野波 寛・広瀬幸雄 (1998)

環境ボランティアの活動が地域住民のリサイクルに関する認知・行動に及ぼす効果 社会心理学研究, 13, 143-151.

(2001.4.10 受理, 2002.2.3 受理)

## 文 献

- Ando, K. (2000) Are participants of environmental movements self-sacrificing? Paper presented at the International Congress of Psychology, Stockholm, Sweden.
- 安藤香織・広瀬幸雄 (1999) 環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的参加意図の規定因 社会心理学研究, 15(2), 90-99.
- 安藤香織・広瀬幸雄・杉浦淳吉・依藤佳世 (1999) リサイクル活動へのコミットメントとボランティアのエンパワーメント 日本社会心理学会第40回大会, p.42-43.
- 安藤香織・広瀬幸雄・杉浦淳吉・西 和久・依藤佳世・垂沢由美子 (2000) ボランティアによって変わるものは何か——ボランティアと一般住民の比較 日本社会心理学会第41回大会, p.146-147.
- Burn, S.M. (1991) Social psychology and the stimulation of recycling behavior: The block leader approach. *Journal of Applied Social Psychology*, 21, 611-629.
- Everett, J.W. & Peirce, J.J. (1991) Social networks, socioeconomic status, and environmental collective action: Residential curbside block leader recycling. *Journal of Environmental Systems*, 21, 65-84.
- Fireman, B. & Gamson, W.A. (1979) Utilitarian logic in the resource mobilization perspective. In M.N. Zald & J.D. McCarthy (Eds.), *The dynamics of social movements* (pp.8-44). Cambridge: Winthrop.
- Hopper, J.R. & Nielsen, J.M. (1991) Recycling as altruistic behavior: Normative and behavioral strategies to expand participation in community recycling program. *Environment and Behavior*, 23, 195-220.
- Oberschall, A. (1993) *Social movements: Ideologies, interests, and identities*. New Brunswick, NJ: Transaction Publishers.
- Olson, M. (1965) *The logic of collective action: Public goods and the theory of groups*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (依田 博・森脇俊雄 (訳) 1983 集合行為論 - 公共財と集団理論 ミネルヴァ書房)